

を以て單に *Oyuz* の *o* を寫せりとするは穩やかならずといはんも、かゝる例は沙耽彌 (*cha-tan-mi*) を以て *Istami* を、怛羅斯 (*ta (tan)-lo-se*) を以て *Talas* を、支汗那 (*tche-han-na*) を以て *Djaghâ nan* を寫せる等其の例頗ぶる多ければ、固より怪しむに足らず。

なほ史記漢書等に記さるゝ烏揭なる部族が *Oyuz* もしくは *Uyur* に相當するものなるべしとの假定説は、從來諸學者の攷究論述したる所なれども、今は進みて此の問題に入らず、只だ唐書に回鶻の古名として明記せらるゝ袁紇・烏紇・烏護の三者につきて管見を述ぶるに止めたり。
(東洋學報第九卷第一號、大正八年一月)

補遺 (二)

此の稿公刊の後、新に回鶻可汗磨延賚の紀功碑の斷片と *Jagla-kan-ata* とて黠戛斯人にて回鶻に移住したる人の墓誌とを見るを得たり。前者は漠北 *Selenga* 河に注ぐ *Hanui* 河 (蒙古遊牧記卷八に哈綏河と記せるも) と *Huni* 河 (珊瑚衣河、遊牧記によれば) との合流點より東南に當る *Sine-usu* 湖の北、一キロメートル半程の處に埋没したるも (古くは呼納衣と書けりと) のにして哈綏は哈綏の誤なるべし) と *Huni* 河

のにして、一九〇九年八月芬蘭の *Ramstedt* 氏の發見に係り、氏は其研究の結果を一九一三年 *Helsingfors* より發行せる *Journal de la Société Finno-ougrienne*, vol. XXX 3 に掲載し、(Zwei uigurische Runeninschriften in d. Nord Mongolei) 又一九一四年に露都波得堡にて印刷せる *Ramstedt* Г. Перевод Надписи Селенгинского

Камня. (Труды Троицко-саявско-кяхт. отд. Русск. географ. общ., XV. Вып. I, стр. 1914Г.)